

小林秀雄「戦争と平和」論

——時勢とすれ違う〈眼差し〉——

佐々木 梓

立命館大学博士課程後期課程院生

1 章 はじめに

批評家・小林秀雄（1902-1983）の戦時中から戦後にかけての言説は、現在も分野を横断し多く検討がなされている。とりわけ戦時下における小林のテクストは、小林の歴史認識の遷移を辿るうえで重要視されてきたといえる¹⁾。本論で取り上げる「戦争と平和」²⁾（『文学界』1942年3月）に関しては、戦後の河上徹太郎による「これは戦争讃美でも、その逃避の詭弁でもない。ただ乾坤一擲の大壮挙に関し、形容が不謹慎で態度が遊戯的だといつて、当局の風向は強く当った。」³⁾という言及をはじめとし、批評家や研究者によって、小林の戦時下における姿勢を論じる際に、数多く取り上げられている。たとえば、幅広く資料を調査し、小林文学における批評精神の分析を試みた批評家・江藤淳は、河上徹太郎と小林の戦時下の気質を比較する際に本作に言及し、そこに「自己の心底にひそむ癒しがたい「孤独感」」⁴⁾が存在することを指摘している。その後の研究者による追究としては、杉野要吉による、本作から戦争と平和が同時に存在し得るものと捉える小林の思想を見出し、その認識と後の「無常といふ事」との連続性を明らかにする研究がみられる⁵⁾。早くに杉野の指摘する、戦時下と平時を並列して捉える思想は、以降の研究者によっても多く論じられている重要な問題である。現在に至るまでの議論の詳細を整理する前に、本作におけるその思想の表現に関し、おおまかに要約したい。

真珠湾爆撃からおおよそ4ヶ月後の1942年3月に発表された本作は、正月元旦の朝、新聞紙面の帝国海軍真珠湾爆撃の写真を縁側の椅子に腰かけながら眺める「僕」——小林の心境を描いている。写真を眺める「僕」の眼下には海と空が広がっており、「僕」はその景色と真珠湾の写真とを重ねる。再び、写真に視線を戻し、感情のないカメラの眼と、生死を超えた兵士達の眼との間に似通うものを見出す。法華経の中の一節を連想しつつ、戦場の兵士が、清澄な眼を持って居るのではないかと考える。やがて「僕」は、戦が起こるのは、人生がもともと戦だから起こる、といった思索に至る。

このように記述される戦争観に関し、尾上新太郎はそこに小林の「思想上の一大転換」を見、戦時を特別視せず、人の生それ自体が戦であるという思想を抽出している⁶⁾。饗庭孝男は「この想像と視力からうまれた鳥瞰図は、歴史もまた、ついに「自然」の一部にすぎないとする思想が小林の裡に潜在的にせよ息づいていたからではないか」⁷⁾と、小林の歴史観をもそこに見出す。思想的変遷の分析の中で本作を取り上げる試みがなされていく中、フランス象徴主義の知見を基に小林文学における批評原理の追究を行ってきた森本淳生は、「美的体験」という観点から本作の再検討を試みている。森本は、「戦争と平和」に関し、従来、そこからは戦争に対する小林の姿勢のみが見出されてきたことを指摘したうえで、小林の表現論の重要な転換点として作品を捉え直している。

「戦争と平和」で語られていたのは「自然」の開示する「美」であった。それは雑念を振り払った無心の兵士に対して現れるものであり、そのとき、爆撃が現実引きおこしたはずの「焦熱地獄」はすでに存在しなかった。「美」と遭遇する者には、内面も外界もなく、心理も世界も消滅している。それはいかなる意味においても「事物のレベル」とは関係がない。⁸⁾

森本淳生の主張に対し、曾根博義は「『表現』を『宿命』とした小林秀雄が、歴史を含み込んだ現実世界においてどう生きたかを、「美」と「戦争」の狭間で、批判的な観点を失うことなく、テキストを通じて内在的に跡づけようとした森本淳生氏の姿勢を私は重んじたいと思う」⁹⁾と評価しながらも、同時に、開戦時の文学作品における表現に関し、美的観念の問題にのみ集約してしまうことの危険性を指摘している。

先行論を概観すると、「戦争と平和」に関する評価はさまざまに分かれながらも、そこに戦時の小林の姿勢を見出し、その後の芸術論と関連させながら論じる研究が多い。しかしながら、思想の変遷の一部として扱われるにとどまることが多く、以下に述べる改稿の問題等、表現レベルでの詳細な分析があまりなされていない傾向にある。

無論、戦時下の小林の言説と結び付けながら、複数の作品を集約する形で、当時の小林の姿勢を位置付ける視点は非常に重要である。しかし、少なくとも、先に挙げた河上徹太郎の証言においては、本作が当局から不興を買っていることから、細部の表現のレベルにおいて当時の時勢との微細な乖離が生じていたことが窺えるのである。つまり、本作から単純に戦時と平時を同列に取り扱う思想そのものを見出すだけでは、開戦直後の時勢における本作の位相が明確に捉え切れないといえる。ゆえに、本作の追究にあたっては、小林文学における思想的変遷という縦軸からの検討のみならず、開戦後の他の文学やそれを取り巻く状況といった横軸の観点からの分析が必要不可欠である。開戦後の文学全体に関し、松本和也は文芸誌における評論を時期ごとに調査した

うえで、「次第に文学者である以前に日本国民であるという属性が前景化され、旧来の文学者の本分を捨てたかのような国家——戦争に直接寄与する言動が目立つ一方、それに対する反動のように、文学精神の保持や水面下での活動が後退戦よりしく展開されてもいった」¹⁰⁾と、文学の社会的有用性を重視し時局に貢献せんとする立場と、その動向の中で文学精神や芸術性を保つ立場とが存在することを指摘する。そのような複雑な磁場の中で発表される作品を検討するには、その作品が時勢の中でどのような特質を有するのかを考えねばならない。

さらには、本作は、戦争に対する意識という、内容の根幹に関わる部分で、戦後の新潮社版全集において改稿が生じている。このような、時勢との距離感や、戦後にかけての意識の変化を考究するためには、まず、細部の表現の分析が不可欠であると考え。その分析を行うことによってはいじめて、戦時における小林の思想、ひいては、戦時から戦後にかけての思想的変遷を体系的に論じる端緒を見出せるといえるのである。

以上の問題意識を基に、本稿では、改めて「戦争と平和」を取り上げ、まずは、文中の鍵となっている写真を見る眼差しの描写に着目し、考察を行う。

今一度、「戦争と平和」における小林の眼差しに着目しながら、作品の記述を分析を行ったうえで、「戦争と平和」が、戦前から戦後にかけての小林の思想を辿るその端緒の一つとなりうる重要な作品であることを、単に表面的な位置づけに止まらず、開戦時の他の文学作品との比較を通し、時勢との距離を明らかにしたい。

以上の手続きを経たうえで、改めて、小林の戦時への所感を明確にする。以上を本稿の目的としたい。

2章 本作を貫く〈眼差し〉

吉田熙生による年譜¹¹⁾によれば、1934（昭和9）年、小林は森喜代美と結婚し、鎌倉町扇ヶ谷403番地に新居を構えたとある。また、扇ヶ谷は海の近い位置にあり、文中で、緑側から海を眺める記述が

あることから、恐らく、1942年当時の小林の住居であると想定できる。次に、写真の掲載紙に関しては、「戦史に燦たり、米太平洋艦隊の撃滅」の見出しの言葉から、『東京朝日新聞』の記事¹²⁾における写真と推察できる。以上のように、テキスト内にて小林がいる位置、ならびに眺める写真を限定したうえで、分析を行う。

正月元旦の朝、僕は、帝国海軍真珠湾爆撃の写真が新聞に載つてゐるのを眺めてゐた。

「戦史に燦たり、米太平洋艦隊の撃滅」といふ大きな活字は、躍り上る様な姿で眼を射るのであるが、肝心の写真の方は、冷然と静まり返つてゐる様に見えた。模型軍艦の様なのが七艘、行儀よくならんで、チョッピリと白い煙の塊りをあげたり、鳥賊の墨の様なものを吹き出したりしてゐる。いや、いや、外観に惑はされてはならぬ、これこそ現に数千の人間が巻き込まれてゐる焦熱地獄を嘘偽りなく語つてゐるものだ、と僕はしきりに自分の心に言ひ聞かすのであるが、どうも巧くいかない。誰も今までにこんな驚くべき写真を撮つた人間はゐなかつたのだぞ、そんな事を心中で繰返すほど、却つて僕の心は落ち着きを取戻し、想像力は、もう頑固に働かうとはしなかつた。あの写真を眺めた人達は、皆多かれ少なかれ僕と同じ様な感じを、驚くべき写真に、驚くべきものが少しもないといふ困惑に似た一種の心理を経験した筈だと思ふ。

人を乗せた実際の軍艦であるはずの船は、小林の眼には「模型軍艦の様」に映り、その軍艦は擬人法が使用されている。また、煙はそれぞれ、「チョッピリと」と形容がなされたり、「鳥賊の墨」に喩えられたりする。その背後には数千の人間がいるはずの写真は、これらの表現から、ある種戯画的に眼差されていることが分かる。以降、その写真は、戦火をありありと想起させるよりも寧ろ、一見そこから乖離しているように描かれていく。緑側の椅子に腰掛けながら、写真から目を離せないでいる小林は、次のように語る。

空は美しく晴れ、眼の下には広々と海が輝いてゐた。漁船が行く、藍色の海の面に白い水脈を曳いて。さうだ、漁船の代りに魚雷が走れば、あれは雷跡だ、といふ事になるのだ。海水は同じ様に運動し、同じ様に美しく見えるであらう。さういふふとした思ひ付きが、まるで藍色の僕の頭に真つ白な水脈を曳く様に鮮やかに浮んだ。真珠湾に輝やいてゐたのもあの同じ太陽なのだし、あの同じ冷い青い塩辛い水が、魚雷の命中により、嘗て物理学者が子細に観察したそのまゝの波紋を作つて拡つたのだ。そしてさういふ光景は、爆撃機上の勇士達の眼にも美しいと映らなかつた筈はあるまい。いや、雑念邪念を拭ひ去つた彼等の心には、あるが儘の光や海の姿は、沁み付く様に美しく映つたに相違ない。彼等は、恐らく生涯それを忘れる事が出来まい。そんな風に想像する事が、何故だが僕には楽しかつた。太陽は輝やき、海は青い、いつもさうだ、戦の時も平和の時も、さう念ずる様に思ひ、それが強く思索してゐる事の様に思はれた。

僕は、又、膝の上の写真を眺め始めた。

まず、二カ所に付した波線部に着目する。引用箇所冒頭の波線部分を読んただけでは唐突に登場する「空」や「海」が、写真のものなのか、別のものなのか、「漁船」が手がかりになるものの、明確には判断できない。しかし、その後の文章を読み進め、二つ目の波線部「僕は、又、膝の上の写真を眺め始めた」に至ると、そこではじめて、これまでの描写が、縁側から見える空や海の景色を対象にしたものであることが完全に判明するのである。この構造を見ると、写真か眼前の景色か、曖昧な部分が残されたまま、間の記述がなされているといえる。視点が、写真から、外の景色に移ったことが、はっきりと示されず曖昧にされたまま、実際の景色の描写がされているのに目を向けたい。

この構造を確認したうえで、景色の描写の分析を行う。一重傍線部において、眼下の漁船から、魚雷が連想され、両者は「同じ様に美しく見えるであらう」と、同様のものとして扱われる。その後もまた、

鎌倉の海上にある太陽と、真珠湾の上で輝く太陽とが同列に捉えられている。戦火にある真珠湾と、通常の鎌倉の海がここで同じように眼差されているといえるのである。そして、この同化の想像は、「太陽は輝やき、海は青い、いつもさうだ、戦の時も平和の時も、さう念ずる様に思ひ、それが強く思索してゐる事のように思はれた」というように結ばれていく。戦場の写真と、眼前の日常の海は対立することなく重ねられ、その眼差しはそのまま、「戦の時」と「平和の時」とを連関させていく。そのように重ね合わせていく際、小林は写真を眺めながら、法華経の中のある表現を思い浮かべる。

僕は、法華経だつたかにあつた文句を思ひ出してゐた。正確には思ひ出さなかつたが、それは衆生の眼に劫火と映るところも、佛の眼には楽土と映るといふ意味の言葉であつた。

あゝいふ言葉は恐らく比喻といふ様なものでは決してないのだらう。僕等の心が弱いので、比喻と受取つてゐるよりは仕方ない、さう考へる方が本当ではないのか。戦場にある人達が佛の眼を得たと言ふのではないが、日常生活の先入観から全く脱した異常に清澄な眼を得てゐるといふ事も考へられやしないか。

小林が受容していた法華経のテキストを詳細に限定することは現時点で困難であるため、本作の発表時期と比較的時期の近く、かつ網羅的な翻訳書である法華経のテキスト『国訳大蔵経』から、該当する箇所を参照したい。

我諸の衆生を見れば、苦悩に没在せり。故に為に身を現ぜずして、其れをして渴仰を生ぜしむ。其の心恋慕するに因つて、乃ち出でて為に法を説く。神通力はくの如し、阿僧祇劫に於て、

常に靈鷲山、及び余の諸の住所に在り。衆生劫尽きて大火に焼かると見る時も、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり。園林諸の堂閣、種種の宝をもって莊嚴し、宝樹、華果多くして衆生の遊樂する所なり。諸天、天鼓を

撃つて常に衆の伎樂を作し、曼陀羅華を雨らして、仏及び大衆に散ず。我が浄土は毀れざるに、而も衆は焼け尽きて、憂怖、諸の苦悩、是くの如き、悉く充滿せりと見る。是の諸の罪の衆生は、悪業の因縁を以て阿僧祇劫を過ぐれども、三宝の名を聞かず。諸の有らゆる功德を修し、柔和質直なる者は、即ち皆我が身、此に在って法を説くと見る¹³⁾。

小林がここで想起しているのは、傍線部の箇所¹⁴⁾であると考えられる。該当の箇所と、「戦争と平和」にて想起されている節との間には、その表現に微妙に差異があることが窺える。本作における法華経の引用に関し、尾上新太郎はまず、典拠の当該箇所について、「「四却」中住却の時が尽き壞却の時が到来、世界壞滅の災害に遇っていると衆生が見る時も、仏の国土は安穩、天・人が充滿していると説くのである」と解したうえで、それに対する小林の文章を、「小林が仏の視点を全的に得たと断定したら言い過ぎだろうが、人間の生死に関する根底的立場を何等かの意味で我ものにしたとは言いうる」¹⁵⁾と、推測する。ただ、ここでは、原典と想起されている一節との微かな相違が看過されている。

写真を眺めながら想起された一文には、「眼」が登場していることに着目したい。典拠において、「見る」の語はあるものの「眼」は存在しない。なおかつ、「見る」が使用されているのは衆生に対してのみであり、傍線部の後半では省略がなされている。対して、小林の想起した表現においては、「衆生の眼に劫火と映るところも、佛の眼には楽土と映るといふ意味の言葉であつた」とあるように、「眼」が付されたうえに、その二つが明らかに対になるように記述がなされていることが分かる。法華経の中の一節が、「戦争と平和」中に引用される過程で、「眼」が強調されているのは、本作品を貫くものに、「眼」や〈眼差し〉といった要素が明確に存在することを意味するもいえるのではないか。本作における視覚を通した表現に関し、同時期に、かつ同じく真珠湾爆撃の報道を題材にした小林の文章「三つの放送」との比較を行ったうえで、より明確に意味付

けを行いたい。そのために、まずは「三つの放送」において、真珠湾爆撃のニュースを耳にした小林の記述に関し、文中の〈三つの放送〉の具体的な内容を示しながら、以下分析を試みる。

3 章 開戦と媒体——「三つの放送」

「戦争と平和」の二か月前に発表された「三つの放送」は、「戦争と平和」同様に、真珠湾爆撃のニュースを扱った作品である。その三つのニュースに関し、まずはニュースの内容を確認したうえで、それを受け止める小林の記述の分析に移りたい。一つ目の放送である「帝国陸海軍は、今八日未明西太平洋に於いてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」は、次に引用する、開戦を告げるラジオ放送と見られる。

臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部、12月8日午前6時発表。帝国陸海軍は、本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。帝国陸海軍は、本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。今朝、大本営陸海軍部からこのように発表されました。¹⁶⁾

二つ目の放送は、1941年12月8日に出された「宣戦の御詔勅」を受けて、太平洋戦争開戦の日、昭同年同日正午に放送された、開戦にあたっての東條英機首相の演説「大詔を拜し奉りて」の放送であると考えられる。以下、その前半部分を引用する¹⁷⁾。

東条首相　ただ今、宣戦の御詔勅が渙発せられました。精鋭なる帝国陸海軍は、今や決死の戦いを行いつつあります。東亜全局の平和はこれを念願する帝国のあらゆる努力にもかかわらず、遂に決裂のやむなきに至ったのであります。(中略)

今、宣戦の大詔を拜しまして、恐懼感激に堪えません。私、小なりといえども、一身を捧げて決死奉公、ただただ宸襟を安んじ奉らんととの念願のみであります。国民諸君もまた、己が身を省みず、醜の御盾たるの光栄を同じくせらるるものと信ずるものであります。およそ勝利の要決は、必勝の信念を堅持することです。建国二千六百年、我等は未だかつて戦いに敗れたことを知りません。

三つ目の放送に関しては、「やがて、真珠湾爆撃に始まる帝国海軍の戦果発表が、僕を驚かした」とあることから、大本営海軍部が発表した戦果発表のラジオ放送であると考えられる。次に引用を行ったのは、1941年12月8日の午後9時のものではあるが、現在確認できる音声資料として、その放送を一部引用した¹⁸⁾。

1. 本8日早朝、帝国海軍航空部隊により決行せられたるハワイ空襲において、現在までに判明せる戦果次のごとし。戦艦2隻撃沈。戦艦4隻大破。大型巡洋艦約4隻大破。以上確実。ほかに敵飛行機多数を撃墜撃破せり。わが飛行機の損害は軽微なり。
2. わが潜水艦はホノルル沖において航空母艦1隻を撃沈せるもののごとしも、いまだ確実ならず。
3. 本8日早朝、グアム島空襲において軍艦ペンギンを撃沈せり。
4. 本日敵国商船を捕獲せるもの数隻。
5. 本日、全作戦においてわが艦艇に損害なし。午後8時45分大本営海軍部からこのように輝かしい大戦果が発表されました。

この放送に関し、「三つの放送」では、次のように言及がされている。

やがて、真珠湾爆撃に始まる帝国海軍の戦果発表が、僕を驚かした。僕は、こんな事を考へた。僕は皆驚いてゐるのだ。まるで馬鹿の様に、子供の様

に驚いてゐるのだ。だが、誰が本当に驚く事が出来るだろうか。何故なら、僕等の経験や知識にとつては、あまり高級な理解の及ばぬ仕事がなし遂げられたといふ事は動かせぬではないか。名人の至芸と少しも異なるところはあるまい。名人の至芸に驚嘆出来るのは、各人の苦心について多かれ少なかれ通じてゐればこそだ。処が今は、名人の至芸が突如として何の用意もない僕等の眼前に現はれた様なものである。偉大なる専門家とみぢめな素人、僕は、さういふ印象を得た。

この箇所からは、繰り返しの引用になるが「戦争と平和」における次の記述が想起される。

あの写真を眺めた人達は、皆多かれ少かれ僕と同じ様な感じを、驚くべき写真に、驚くべきものが少しもないといふ困惑に似た一種の心理を経験した筈だと思ふ。

両者を比較する際、まず重要なのは、同じ真珠湾爆撃というニュースを知る光景が描かれているものの、その媒体が異なるという点である。「三つの放送」では、聴覚によって、「戦争と平和」においては、視覚によって、それぞれ真珠湾爆撃のニュースを受容している点で、大きな差異がある。ラジオ放送では、〈人々〉とともに自然に驚く様子が描かれるものの、のちに「本当の驚きかどうか」と懷疑する。ささいではあるものの、戦果発表と、それを聴く「僕」との距離は、初出誌に掲載された他の随筆の表現と比較することで、その輪郭が浮かび上がるといえる。

初出誌である『現地報告』の目次を確認すると、「三つの放送」は大森浩太「この歓喜」、島木健作「海軍志願兵」の二作品と同時で掲載されている。見出しは付されていないが、他の二作品は随筆と見られることから、恐らく本作も随筆として掲載されたと推し量れる。大森、島木の作品も同じく12月8日の報道に関する随筆であるため、今一度「三つの放送」と比較したい。

島木健作の「海軍志願兵」における、兵士の空中

戦を表した「彼等が死生の間に空中において演ずるところは殆ど芸術である」¹⁹⁾といった記述には、先の小林の「名人の至芸」という比喻と、おのずと重なる。とはいえ、戦地と、その報道を受容する、兵士でない人間との間にある隔絶は明文化されず、率直な賞賛が述べられる。また、大森浩太の随筆には、詔勅ならびに一連の戦果を聴いた際、「相継ぐ快報に、肩高く、頬は輝き、この時、この国に、生を受けた光栄を、しみみ\と、心の奥深く感ずるのである。」²⁰⁾とその感慨が述べられている。そこで喜びを表すると同時に、大森は、米英との開戦に際し、感慨だけでなく、「生きむとする欲念」が湧き起ったと述べ、その理由として、「家族一同、ラジオにしがみ付いて、勝利の発表に喝采する、この喜びを続けたい」²¹⁾という願いを挙げる。同誌のこういった随筆と比較すると、「三つの放送」にて記される心理には、驚く行為への「懷疑」が挿まれることにより、純粋な歓喜の表明として読むには、ほんの僅かではあるものの、ノイズが生じていることが窺えるのである。

「三つの放送」においては、このようなノイズは、存在はするものの、微小にとどまる。一方で、「戦争と平和」では、新聞紙上の写真に関し、驚くべき写真であることを、自身に言い聞かせる「僕」の様子が記述され、そこにはある種の義務感が伴わなければならないほど、自然な驚きが存在しないことが窺えるのである。

このことから、ラジオと写真という媒体の違いが、そこから戦時下の情報を受け取る「僕」の感覚にも影響している可能性を見出すとともに、ここで描かれる違和を重視したい。「三つの放送」と「戦争と平和」は対照的な作品というよりは、むしろその違和によって連続性を有しているといえる。「三つの放送」で生じている、報道内容と、銃後にいる自身との距離は、微細であれど生じていたことは先に述べた。「戦争と平和」では、ラジオ放送と写真という、メディアの違いによって、その距離、換言すれば、現地の様子をありのままに受容できないという〈違和〉が浮き彫りになっていると考えられる。銃後に生きる人間が、戦地で戦う人間の感覚と上手く

一体化しきれない感覚、これを以降〈違和〉と称したうえで、このように描かれる〈違和〉に関し、同時期における他作品との比較を通し、その内実をより明らかにしたい。

4 章 時勢とすれ違う〈眼差し〉

本章では、12月8日の開戦、とりわけ戦況の報道を受容する瞬間を主に取り上げた同時期の作品と本作を比較する。まず、「戦争と平和」の掲載誌である『文学界』には、開戦後すぐに、河上徹太郎によって12月8日を讃える評論が寄せられている。

遂に光栄ある秋が来た。

しかも開戦に至るまでの、わが帝国の堂々たる態度、今になつて何かと首肯出来る、これまでも政府の抜かりない方策と手順、殊に開戦劈頭聞かされる輝かしき戦果。すべて国民一同にとつて胸のすくのを思はしめるもの許りである。今や一億国民の生れ更る日である。しかもさうなるのを他から強要されるのではなくて、今述べた眼前の事態がすべて我々をして欣然そこに到る気持を湧き起させてくれるのである。こんなに我々が、陛下の直ぐ御前にあつて、しかも醜の御楯となるべく召されることを待つてゐるとは、何といつてもかういふ事態が発生せねば気付かなかつたのであらう²²⁾。

河上の文章では、戦争の本格化に向けて国民の精神が一新されることを、強制ではなく、あくまでも自然な変化として記述している。さらに、真珠湾における戦果は「眼前の」事態として表されている。このような、戦場である現地の状況と、「国民」の心理とを一体化したものとして描く傾向は、河上の文章に限らず、真珠湾爆撃の報道を受けて書かれた、同時期の他の作品や雑誌にも見られるといえる。たとえば、ラジオ放送に対し、高村光太郎は次のような心象を『中央公論』に書き残している。

戦艦二隻撃沈といふやうな思ひもかけぬ捷報が、少し息をはずませたアナウンサアの声によつて響きわたると、思はずみな居る人達から拍手が起る。私は不覚にも落涙した。黒雲を双肩に担つた海軍将兵のそれまでの決意と労苦を思つた時には悲壮な感動で身ふるひが出たが、ひるがへつてこの捷報を聴かせたまうた時の陛下のみこころを恐察し奉つた刹那、胸がこみ上げて来て我にもあらず涙が流れた。²³⁾

12月8日の当日、第二回中央協力会議開会の議場にて、戦果の報道を聴いた高村は、議場の人々とともに震撼するとともに、戦地の兵、ならびに詔勅を出した天皇の心情と、自らの胸中とを重ね合わせて行くのである。このような、報道を通して、精神が一体化していく感覚は、開戦を特集した『文藝』の一九四二年新年号における島木健作の随想にも見られる。

妖雲を排して天日を仰ぐ、といふのは實にこの日この時のことであつた。一切の躊躇、逡巡、遲疑、曖昧といふものが一掃されてただ一つの意志が決定されたのである。瞬時にしてこの意志は全国民のものとなつたのである。眇たる自分のごときもののこの偉大な時に際会しての生くる道もこの意志も下に決定されたのである。私は日本の国柄の有難さ尊さを今さらのやうに肝に銘じて感じた。

夜、私は約束の文章を書かうとして机に向つた。私はペンを握つてゐる自分の手を見て嚴肅な思ひに打たれた。筆をとる身の責務の重大さをこんなにも感じた時はなかつた。それは文學者としての誇りの感情でもあつた。このかぼそい手もこの一本のペンを握りしめることによつて国家と国民のために小さな力であることができる、といふことの喜びであつた²⁴⁾。

島木は自己の意志それ自体が国家と一体となる感覚と合わせて、身体的な事情により銃後にあつても、執筆活動によって国家に寄与しうる存在となること

を、いわば決意表明の形で書き表しているのである。

最後に、戦時下において小林と交流を持っていた従軍作家・火野葦平²⁵⁾による小説「朝」を取り上げたい。評論や随筆ではないものの、主人公である研吉が開戦の報道を知る際の心中は、開戦時の表現を考究するにあたり、看過できないといえる。

アナウンサーの声も興奮していることが観取された。ずっと、身体の中を霊気のやうなものが通つた。長びいてゐた日米会談が決裂したのである。日本は米英とすでに戦闘を始めた。研吉の頭に多くの島島の点在してゐる縹渺たる西太平洋の地図がひらめいた。そのうへを踏みしめてゆく兵隊の姿が浮んだ。身内に興奮に似たものがぬくぬくとわきはじめた。しかし、それはおどろきの感情とはまったく違つてゐた。自分の勇気の所在をうしなふまいと反省しつつ、国の運命のなかへ溶けこまうとするやうな快感であつた。祖国といふ言葉を、いまこそ、どんな大きな声でもでも叫ぶことができるといふ安心である。研吉は自分の落ちつきを、これは自分ひとりではなく、国民全部の落ちつきでもあらうと、はつきりと信じることができた²⁶⁾。

小説において描かれる研吉の心中は、先に挙げた高村の文章のように、①聴覚によって情報を得ながらも、戦地の様子を想起する過程が描かれる。さらには、島木の文章に見られたような、②自らの存在や意志が「国の運命」と一体化する感覚をも表されている。ここから、開戦を取り上げた作品に存在する二つの傾向を見出したい。

そのうえで、小林の作品に立ち返ると、第一章で述べたような、報道写真の奥に存在するはずの戦地の様子をそのままに受け止められない小林の〈眼差し〉、そして、その微細な兆しといえる、「三つの放送」における、ラジオ放送における戦果と銃後との距離は、①の傾向のように、報道の内実が眼前にあるように想起する受容とは乖離している事実が浮かび上がる。すると、このような乖離が情報局から「不謹慎」とみなされた理由に繋がるのではないか。

戦時下において、情報局文芸課長であった井上司朗は、「それが昭和十五年一月、機構が大拡充され、常に対話を旨とする内閣情報部とは全く異質の情報局——五部十七課を擁する統制の府と変り、私は従来、文化担当だった関係上、情報局第五部三課（後の文芸課）に配属され、太平洋戦争と共に課長に押し上げられた。」²⁷⁾と、それ——各省との連絡調整を行う機関であつたという内閣情報部に組織変更が生じたことによって、情報局が誕生したと回想している。情報局事務分掌規程²⁸⁾からは、第三課の業務の一つに「文化雑誌の内容調査並に執筆者指導」が存在していたことが窺え、恐らく「戦争と平和」も『文学界』の調査の際に、情報局内の人間に目に留まったものと考えられる。

その情報局は、開戦後の1942年12月8日、1942年を回顧する資料「大東亜戦争一周年記念資料 大東亜戦争一ヶ年の回顧」を残しており、そのうちの「三、社会教育、文化指導及宗教方策」の項目には、「戦時下の文教問題は将来の皇国の題氏名を負担すべき学徒の教育錬成を主眼とする一面、現在社会各部面に活躍する一般成人の戦時意識を昂揚し、戦時生活を緊張強化せしめ、文化、宗教、思想など各分野の戦時体制を確立して大東亜建設の使命達成に具現せしめねばならぬ。」²⁹⁾とある。ここからは、あらゆる立場、分野の人間全体が、「戦時意識の昂揚」の対象となっていたことが窺えるのである。

また、本作の5年前に、小林は戦争に関し所感を述べる際、戦争体験者だけが持っている、他者に伝達するのが非常に困難な特定の真実を「この種の秘密」とする。そのうえで、戦地の報道は、その媒体が正確であればある程、その「秘密」は捨象されるうえに、本来、戦地にいる人間と、銃後の人間との間に存在する筈の生活感情の差異を覆い隠してしまうことを指摘している。

無論ニュースといふものは、この種の秘密など必要とはしない。ニュースは極力この種の秘密を除き去つて正確を期さうとする。映画があらゆるニュースの王者たる所以も其処にあるのであり、僕等は其処に或る事件の正確な貌、その

事件の体験者が抱く真実の一切を切捨て、了つたその事件の正確極まる模写を見る。この正確さといふものが、僕等に一種の心理的錯覚を起させる。そして実際に戦ふ人々の生活感情と僕等の生活感情との間に当然あるべき開きを糊塗して³⁰⁾。

この記述からは、戦地の人間と銃後の人間の間にある意識の距離を、小林がこの時点において既に明確に認識していたことがわかる。すると、12月8日を迎えても、完全に沈潜させることのできなかつた違和感の姿が、「戦争と平和」には見え隠れしている——と同時に、その率直な違和感が、結果として、自らの意識を戦地の人間と一体化させる当時の傾向との乖離に繋がったといえるのである。

5 章 「戦争と平和」の位置付け

1 節 結部の改稿に見る小林の戦後

最後に、戦後においてなされた本作の改稿を分析したうえで、その変化と、戦時下から戦後にかけての小林の戦争認識の変化が連関していることを述べたい。

「戦争と平和」の結部は、1955年の新潮社版『小林秀雄全集』に収録される際に、改稿が生じている。初出における結部と、1955年の全集における結部を並べると、次のように、複数箇所において差異が確認できる。

僕は写真を見乍ら考へつゝけた。写真は、次第にその本心を僕に打ち明ける様に見えた。何もかもはつきりしているではないか。はつきりと当り前ではないか。戦に関する理論も文学も戦ふ者の眼を曇らす事は出来ない。戦ふものの健康が語つてゐるではないか。戦争と平和とは全く同じものだ、と。トルストイ（ママ）が、「戦争と平和」を書いた時に洞察したものその事ではなかつたらうか。近代人は、犯罪心理学といふ様なものを思ひ付いた点で、戦争心

理学といふ様な奇妙なものを拵へ上げて了つた。人々がよく戦ふ術を次第に忘れて来た結果である。「戦争と平和」といふ大小説さへ、その為に汚れてゐる。戦は好戦派といふ様な人間が居るから起るのではない。人生がもともと戦だから起るのである。反戦思想といふ様なものはもともと戦争にも平和にも関係がない。（二月十日）³¹⁾

僕は写真を見乍ら考へつゝけた。写真は、次第に本當の意味を僕に打ち明ける様に見えた。

何もかもはつきりしてゐるのではないか。はつきりと当り前ではないか。戦に関する理論も文学も、戦ふ者の眼を曇らすことは出来まい。これは、トルストイが、「戦争と平和」を書いた時に彼の剛毅な心が洞察したぎりぎりのものではなかつたか。戦争と平和は同じものだ、といふ恐ろしい思想ではなかつたか。近代人は、犯罪心理学といふ様なものを思ひ付いた点で、戦争心理学といふ様な奇妙なものを拵へ上げて了つた。戦は好戦派といふ様な人間が居るから起るのではない。人生がもともと戦だから起るのである³²⁾。

両者を比較すると、全集では多く変更および削除がなされていることが分かる。戦争に関係する文学や理論よりも、現場の兵士の眼差しを第一に置く基本的な姿勢に変わりはないが、全集では「戦争」と「平和」を同じものとする思想に対し、「恐ろしい」という形容がなされている。また、最も大きな差異として、初出で存在した「反戦思想といふ様なものはもともと戦争にも平和にも関係がない」という一文の削除が挙げられる。戦争を人間にとって特異なものとしてみなさず、人生それ自体を戦とする。このことが、初出の最後の一文に繋がる構成となっていたと考えられるが、その最後の一文が削除されることにより、全集は「人生がもともと戦だから起るのである」によって結ばれるのである。

「戦争」と「平和」の境界の曖昧さの記述は、初出と新潮社版全集、どちらにおいても行われている

が、これらの異同により、その着地点にも差異が生じているのである。初出においては、「恐ろしい」という語が付されないことで、その是非は問われないうまま、結ばれる。しかし、全集においては、戦争・平和の両者の近似性を説く思想を「恐ろしい」と形容すること、さらには最後の一文の削除により、反戦思想を俯瞰する立場が沈潜し、この文章のみでは、筆者自身の立場が見えづらくなっている。この修正・削除が、戦後に行われていることを考えると、ここに、小林の思想あるいは、戦時に対する感覚の変化が窺える可能性が存在する。

その変化をより具体的に明らかにするために、戦後における小林の戦争観を参照したい。次に引用する、『きけわだつみのこえ——日本戦没学生の手記』を読了した小林の感想からは、終戦後における小林の戦争観が明確に窺える。小林は、「平家物語」を例に挙げながら、「人間らしい物語」を創出できる戦争も実際に可能だった時代もあるが、現代では不可能になったと述べ、手記を読んだ感想を次のように語る。

学生の手記中には、娑婆といふ言葉がしばしば使はれてゐるが、出征すればもう彼等は娑婆にはゐないと皆感じてゐる。現代の戦争とは、もはや娑婆の出来事ではないのである。恐るべき兵器を前にして、人間はもはやその勇気を試すことも、その意志を鍛えることも不可能だ。爆弾の餌食に英雄も卑怯者もない。戦争といふ暴力、それはもはや悪でさへない。悪なら善に変らぬとも限るまい。³³⁾

ここには、もはや「戦の時」と「平和の時」を重ねて行くような見方は存在しない。それどころか、現代の戦争は人間の生きる「娑婆」の出来事ですらないと述べられる。人間の日常的な心理や価値基準の枠組みとは隔絶したものとして戦争を捉える見方に、終戦を経て変化したと考えられるのである。そしてその変化が、改稿という形に表れたといえるのではないか。

2 節 おわりに

戦地にいない人間が戦地の報道を受容する際に生ずる感情の隔絶に関し、小林は早く1937年の「戦争について」の時点で感知していた。そういった隔絶は戦争が本格化するにつれ、明確に記述がなされなくなっていくものの、「戦争と平和」において、その隔絶は完全に沈潜することなく、写真という対象との間に生じた、いわば違和として描かれていることを明らかにした。そして、違和という形で残存していた、戦地に対する心理的隔絶は、他の作品で表現される、12月8日の受容のあり方と乖離が見られ、そのような乖離が、当時情報局から本作が非難されたことに起因する可能性を示した。

さらに、戦後において本作に生じた改稿に目を向けると、本作の発表当時、戦時下と平時を連続線上にあるものとして捉えようとしていた小林の見方は、戦後、小林自身によって「恐ろしい思想」と形容がなされることにより、相対化されている。本作は、単に時局の肯定にとどまらない、小林の〈眼差し〉が読み取れるのみならず、戦争という事象に対する、小林の認識の変化を考究するうえで、いわば鍵となる作品であるといえる。それだけでなく、記述、写真、映像と媒体が進化を遂げる中で、「戦争と平和」において微細に生じている、眼前の写真に没入しきることのできない違和や、先の「戦争について」における戦地報道の受容の際、本来そこに存在すべき心理的隔絶の指摘は、おそらく当時の時代状況に留まるものではないだろう。報道媒体は現代においても発達を遂げる中で、「戦争と平和」ならびにその表現によって前景化する小林の戦争報道に関する思想を、今一度熟視したい。

【付記】

- ・本稿は2022年3月28日開催のメディア資料研究会（於・立命館大学国際平和ミュージアム）での報告を基に執筆した。会場内外でご意見やご指摘をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。
- ・本研究は、立命館大学国際平和ミュージアム平和研究プロジェクト「戦時・戦後における文学者を取り巻く時代意識の通時的研究」の研究助成を受けた成果の一部である。

【注】

- 1) 近年では、たとえば綾目広治（『小林秀雄 思想史のなかの批評』アーツアンドクラフツ、2021年2月）は、戦時下に書かれた小林の歴史論を取り上げながら、戦争という現実に向ける小林の態度と、それに伴う歴史観の微細な変化を指摘している。また、戦時下の小林の〈沈黙〉の姿勢に関する従来の批判的な評価に対し、山本勇人（『「沈黙」する批評言語』『日本近代文学』第106集、2022年5月、96頁～111頁）は、死者の言葉を傾聴する〈哀悼〉の観点から、その〈沈黙〉に言語行為としての《沈黙》を読み取る。
- 2) 本論では、小林秀雄「戦争と平和」および「三つの放送」の引用について、それぞれ初出誌である『文学界』（1942年3月）、『文藝春秋 現地報告』（1942年1月）から引用を行った。その際、旧字は新字に改めた。また、引用部への傍線は全て論者によるものである。
- 3) 河上徹太郎「解説」（『小林秀雄全集第六巻 無常といふ事』新潮社、1955年12月、257頁）
- 4) 江藤淳『小林秀雄』（『江藤淳著作集 3』講談社、1967年9月、228頁）
- 5) 杉本要吉「「戦時下の抵抗文学」ノート」（『日本近代文学』第12集、1970年5月）
- 6) 尾上新太郎「小林秀雄「戦争と平和」論」（『大阪外国語大学学報 言語編 文学編 文化編』77巻、1989年3月、73頁～82頁）
- 7) 饗庭孝男『小沢コレクション 50 小林秀雄とその時代』（小沢書店、1997年3月）
- 8) 森本淳生『小林秀雄の論理——美と戦争』（人文書院、2002年7月）
- 9) 曾根博義「十二月八日——真珠湾——知識人と戦争」『國文学解釈と教材の研究』（第51巻5号、学燈社、2006年5月、46頁～55頁）
- 10) 松本和也『太平洋戦争開戦後の文学場』（神奈川大学出版会、2020年5月、125頁から126頁）初出は松本和也「太平洋戦争開戦後における文学者の使命」（『文教大学国際学部紀要』30巻第1号、2019年7月）。
- 11) 吉田熙生編『小林秀雄必携』（学燈社、1993年）
- 12) 「戦史に燦たり、米太平洋艦隊の撃滅」（『東京朝日新聞』1942年1月1日、朝刊）
- 13) 『国訳大蔵經 經部 第1巻』（国書刊行会、1935年7月、212頁～213頁）
- 14) 法華經研究者の植木雅俊は、この箇所に関し、「衆生たちが、この世界を焼かれていると見たり、また想像したりする時、その時にも、私のこのブツダの国土は、神々と人間たちで満たされているのだ」（『梵漢対照・現代語訳 法華經 下』（岩波書店、2008年3月、240頁）と解している。
- 15) 注5に同じ。
- 16) 引用及び、音声資料の確認は、「昭和16年12月8日のラジオ（一）午前7時の臨時ニュース「太平洋戦争開戦」（https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/sp/movie.cgi?das_id=D0001400295_00000、最終閲覧日は2024年9月25日）から行った。
- 17) NHK 戦争証言アーカイブズ「大詔を拜し奉りて（上）」（前掲）
- 18) NHK 戦争証言アーカイブズ「午後9時のニュース「12月8

日の海軍の戦果」」（前掲）

- 19) 島木健作「海軍志願兵」（『現地報告』第52号、文芸春秋社、1942年1月、32頁）
- 20) 大森浩太「この歓喜」（『現地報告』第52号、文芸春秋社、1942年1月、28頁）
- 21) 注18に同じ
- 22) 河上徹太郎「光栄ある日——文藝時評——」（『文学界』第9巻第1号、1942年1月）
- 23) 高村光太郎「十二月八日の記」（『中央公論』1942年1月）
- 24) 島木健作「十二月八日」（『文藝』改造社、1942年1月、24頁～25頁）
- 25) 戦時下における両者の影響関係に関しては、五味潤典嗣『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』（共和国、2018年5月、306頁～323頁）において、伝記的事項とテキスト分析の両面から詳細に論じられている。
- 26) 火野葦平「朝」（『歴史』生活社、1943年5月、211頁）
- 27) 井上司朗『証言・戦時文壇史』（人間の科学社、1984年6月、64頁～65頁）、なお、井上は本書で、戦時下において、情報局課長という立場に関し、敗戦の場合を考え「一番親身になって心配してくれた」（67頁）人物として、堀辰雄、神西清に加え、小林秀雄の名前も挙げている。
- 28) 1964年に出版された『戦前の情報機構要覧：情報委員会から情報局まで』を参照した。なお、本書は奥付が存在せず、本書の内容を再録している、奥平康弘監修『言論統制文獻資料集成 第20巻』（1992年2月、巻末）では、「刊行者は不明であるが、その内容から政府部内の資料といわれる」と説明が付されている。
- 29) 『情報局関係極秘資料 第8巻』（不二出版、2003年9月、371頁）
- 30) 小林秀雄「戦争について」（『改造』1937年11月、219頁）
- 31) 小林秀雄「戦争と平和」（『文学界』1942年1月）
- 32) 小林秀雄「戦争と平和」（『小林秀雄全集第六巻 無常といふ事』新潮社、1955年12月、116頁）
- 33) 小林秀雄「きけわだつみのこえ」（『夕刊新大阪』、1950年1月）、引用は『小林秀雄全集第9巻 私の人生観』（新潮社、2001年6月）より行った。

